

# 東北農政局長賞受賞

「住んでよかった。住んでみたい。」

緑の山波がつらなる理想郷づくり

いりやこうそうそくしんいんかい

受賞者 **グリーンウェーブ入谷構想促進委員会**

みやぎけんもとよしぐんみなみさんりくちょう  
(宮城県本吉郡南三陸町)

## ■ 地域の沿革と概要

入谷地区がある南三陸町は、宮城県北東部に位置しており、平成 17 年に志津川町と歌津町が合併した町である。東は太平洋に面し、その他三方は山に囲まれており、海岸線には海岸段丘が形成されている。湾内はリアス式海岸の豊かな景観を有し、南三陸金華山国定公園の一角を形成している。

年間平均気温は約 11℃、年間降水量は約 1,200mm で、太平洋沿岸に位置するため、海流の影響により夏は涼しく、冬は雪が少なく比較的温暖な地域となっている。

経済面をみると漁業、特に養殖漁業が町の発展において大きな役割を果たしてきた。古くからノリ、カキ、ホヤなどの養殖が行われ、昭和 50 年代になると世界に先駆けたギンザケの養殖が多くの水揚げを誇ってきた。近年では、ワカメ、ホタテ等の養殖も盛んに行われ、資源管理型漁業を積極的に推進し資源増大に努めている。

農業は、中山間地域ということもあり、かつては養蚕と葉たばこ、麦類、大豆などの畑作物の生産が中心であった。中でも養蚕は仙台藩養蚕発祥の地として栄えてきた。現在は、小規模ながら水稻をはじめ野菜、果樹、畜産、収益性の高い施設園芸を組み合わせ

第 1 図 位置図



※ 白地図 kenMap の地図画像を編集

第 1 表 地区の概要

事項	内容	
地区の規模	大字単位の集団	
組織の性格	機能的な集団	
農家率 (内訳)	44.7 %	
	総世帯数	519 戸
	農家数	232 戸
販売農家数 (内訳)	232 戸	
	専業農家	32 戸
	1種兼農家	24 戸
	2種兼農家	176 戸
主要作目 (作付面積等)	水稻	47.6 ha
	野菜類	5.5 ha
	花き類・花木	6.1 ha
農用地の状況 (内訳)	耕地計	204.1 ha
	田	92.5 ha
	畑	107.2 ha
	樹園地	0 ha
	耕地率	%
	農家一戸当たり農用地面積	0.9 ha

た複合経営が営まれている。

## ■ むらづくりの概要

### 1. 地区の特色

グリーンウエーブ入谷構想促進委員会のある入谷地区は、南三陸町の中心部から北西に4 kmほど離れた場所に位置している。当地区は昭和30年3月の市町村合併前の旧入谷村であり、10行政区、519世帯の農山村である。

地区の約8割が山林で占められており、農用地の面積は少ない上に点在していることから、かつては養蚕や葉たばこの生産、林業で栄えてきた。特に養蚕は地域の産業として大きな役割を果たしてきたが、現在は2次、3次産業に従事する世帯が多くなっている。

地区の中心の小高い丘には、旧武家住宅の「松笠屋敷」と入谷地区の養蚕の歴史を伝える「シルク館」があり、平成7年に当時の旧志津川町が、この両施設と周辺の山林農地を含めて、「ひころの里」と銘打ち、郷土の歴史を体験できるエリアとして開設している。

### 2. むらづくりの基本的特徴

#### (1) むらづくりの動機、背景

北上山地の南端に位置する入谷地区の農業は、山間狭隘な立地条件の下で、養蚕、葉たばこの生産、畜産を主として稲作との複合経営を行ってきた。しかし、農畜産物の輸入自由化や価格の低迷等、農業を取り巻く情勢は厳しく、また、社会・経済情勢の変化により、若年労働力が流失し、農業従事者の高齢化と担い手不足が進んでいる状況にあった。

このような中、昭和61年、入谷地区の有志で組織していた「入谷を考える会」では、この状況を改善し、より良いまちづくりを実践していくための新たな組織の立ち上げの検討を始めた。

当初は地域の人から理解が得られなかったが、「地域全体（全行政区）が一体となって取り組んでいかなければ活性化は図られない。」との思いで各行政区長を説得した結果、平成3年に全行政区の全戸が加入する「グリーンウエーブ入谷構想促進委員会（以下「委員会」という。）」の発足に至った。

委員会では、地域にある潜在的な資源、史跡、文化財を活用して、農村を単なる生産の場としてではなく、憩いの場として整備すること、研修や交流の機会を創出することにより、意欲に富む優れた後継者の育成・定着を図ることなど、「住んでよかった。住んでみたい。」というまちづくりを目指して各種活動を展開している。

#### (2) むらづくりの推進体制

##### ア 委員会の組織体制

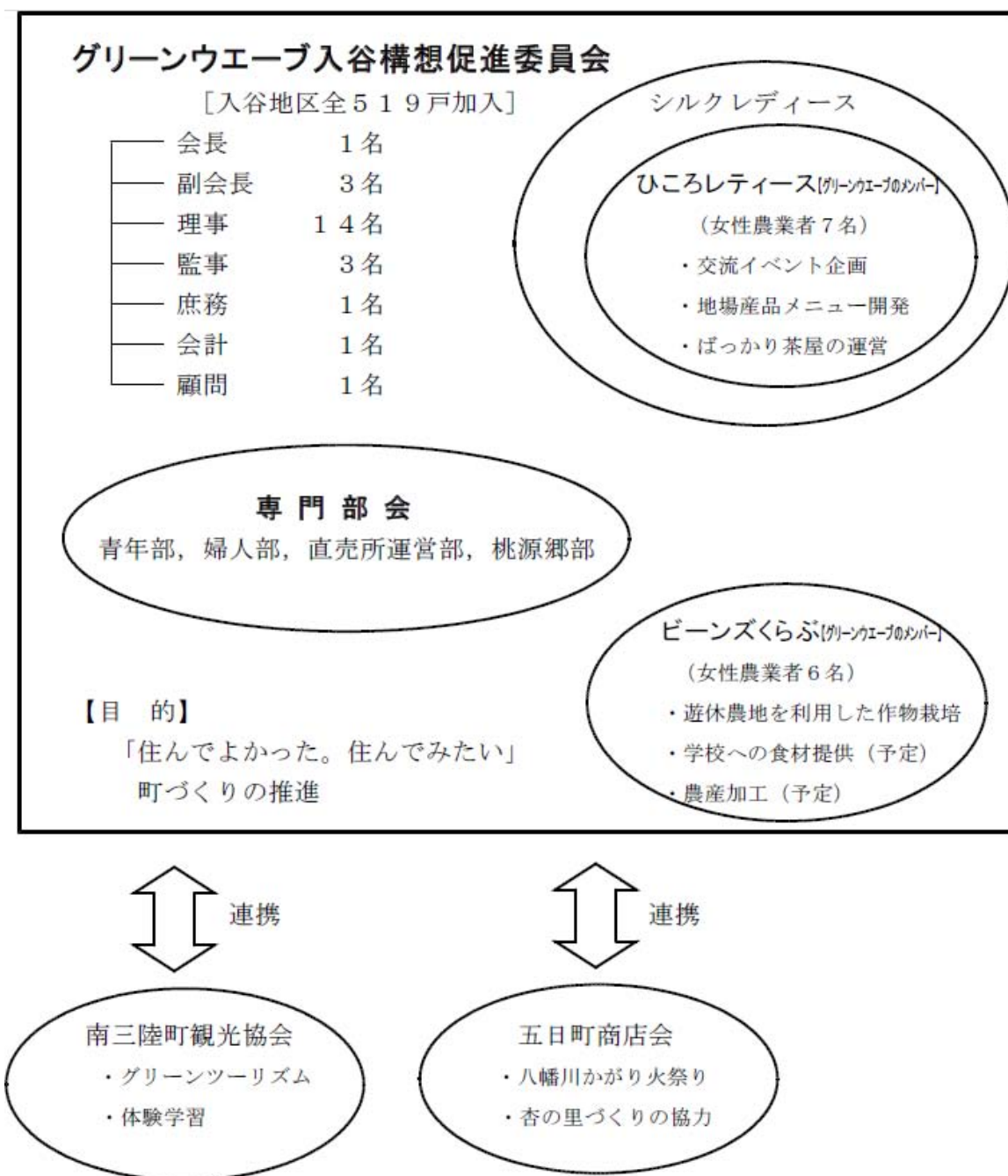
委員会には、地区の全戸（519戸）が加入し、まさに地域ぐるみでむらづくり活動に取り組んでいる。

委員会の中には4つの専門部会（青年部、婦人部、直売所運営部、桃源郷部）が設置され、年間の事業計画を策定し事業を実施している。

また、委員会の女性メンバーにより、ひころの里の管理を行う「ひころレディース」、遊休農地を活用して作物を生産する「ビーンズくらぶ」が結成され、委員会と連携して活動を行っている。

なお、各専門部等の主な活動は以下のとおりとなっている。

第2図 むらづくり推進体制図



#### ① 青年部・婦人部

町内及び都市住民との交流を目的とした、盆踊り、秋まつり等のイベントの企画運営や、花の植栽などの環境保全活動を行っている。

#### ② 直売所運営部

地域住民手作りの直売施設「入谷サン直売所」における地場産品の販売、農産物加工の研修や野菜作りの講習会を行っている。

#### ③ 桃源郷部

遊休農地及び山林への花桃、杏、桜、梅等の植栽活動、新たな地場産業としての花木の生産販売のほか、毎年地元の新入学児童に花桃の苗木を贈る活動などを行っている。

#### ④ ひころレディース

ひころの里の指定管理者となるため、平成 18 年に委員会の女性メンバー 7 名で結成された。繭細工作りの体験講習や施設内で地元食材を活かした食事の提供等を行っているほか、委員会と連携し毎年、盆踊り、秋まつりを開催している。

#### ⑤ ビーンズくらぶ

遊休農地を活用した作物生産に取り組むため、平成 21 年に女性農業者により新たに結成された。生産物は直売所や J A へ出荷しているが、今後は委員会と連携し地元のイベントでの販売なども計画している。

### イ 連携してむらづくりを行う他の組織・団体及び行政との関係

#### ① 五日町商店会との交流と桃源郷構想

入谷地区の住民と当地区の南東部を流れる八幡川はちまんがわの下流にある五日町の住人とは、親戚の関係にある者が多く、入谷地区と五日町商店会は昔から交流が盛んであった。

このような関係から、平成 3 年の委員会設立時には、五日町商店会から日頃の交流の感謝と委員会設立のお祝いを込めて、杏、花桃などの苗木が贈られた。

このことを契機に、委員会の専門部会に桃源郷部を設置し、遊休農地を活用した「杏の里」づくりの取り組みを始めた。今まで約 6,000 m<sup>2</sup>に杏の木を植栽しており、杏のほか花桃や梅をひころの里周辺の山林に植栽し、花が咲き乱れる里山とする「桃源郷構想」を推進している。

また、桃源郷構想の一環で、毎年、地元の新入学児童に花桃の苗を贈り記念植樹をしてもらう活動も行っている。

この他、毎年五日町商店会で行っている「八幡川かがり火祭り」に協賛団体として参加し、祭りで使用する竹灯籠の製作を委員会が行い、祭りの盛り上げに一役かっている。

## ② 南三陸町観光協会との連携

グリーン・ツーリズムの取組みとして、委員会の青年部が中心となり、南三陸町観光協会が行っている農林漁業体験旅行に協力し、農業体験及びファームステイの受け入れを行っている。

この体験旅行の取組みは平成 19 年から始まり、年間 1 千名を超える体験旅行者を受け入れており、そのうち半数程度を委員会が受け入れている。

農業体験では、受け入れた委員会のメンバーが講師となって指導を行っており、春の田植えや、野菜の種まきに始まり、稲刈り、野菜の収穫、キノコ狩り等、観光協会と連携し、体験メニューの充実を図りながらグリーン・ツーリズムを推進している。

## ■ むらづくりの特色と優秀性

### 1. むらづくりの性格

入谷地区では、傾斜地が多く農地が点在するなど、農業には厳しい条件の中、水稻をはじめ路地野菜、果樹、畜産、収益性の高い施設園芸を組み合わせた複合経営が営まれている。

また、中山間地域等直接支払制度を活用し、農地や農業用施設の維持・保全、多面的機能の確保を図り、持続的に農業を行っている。

古くから親好の深い五日町商店会と連携し、遊休農地を活用して「杏の里」づくりの取組を行ったり、女性グループが「ビーンズくらぶ」を立ち上げ、遊休農地において野菜の栽培を開始したことにより、拡大していた耕作放棄地の解消を図っている。

地域の農業が低迷を続ける中、農産物直売所「入谷サン直売所」を開設し地域の拠点施設に成長させている。

近年では、都市と農村の交流を促進し、にぎわいのある地域とするため、町の観光協会と連携しグリーン・ツーリズムに取り組んでおり、体験メニューの充実度や人材育成の観点から、宮城県の代表的な受入組織となっている。

地区の地形的条件などから大規模農業の展開は難しいため、地区内外及び都市との交流により地区の活性化を図ることを目指し活動を展開している。



写真 1 直売所の外観

### 2. 農業生産面における特徴

#### (1) 入谷サン直売所の活動

入谷地区では、農業従事者の高齢化や農畜産物価格の低迷等により、地域の活力の低下が懸念されていた。

このような中、平成 12 年 3 月に地区内を通る国道 398 号線沿いに、直売施設「入谷サン直売所」をオープンした。直売所は地域住民手作りによる簡易な単管パイプの構造となっており、建物の資材はすべて地域の人たちが持ち寄った。

営業は基本的に毎週土曜・日曜日、お盆と年末年始の期間に行っている。現在は地域に定着し、町内外の固定客を中心に好評を得ており、売上げも年々伸びている状況で、オープン当初は年間 6 百万円ほどであったが、今では、1 千万円を超える売上げとなっている。

この直売所には地区内の農家が誰でも出荷できることから、生産意欲の向上に繋がっており、最近では若いお母さん方が多く関わるようにもなり、地域に元気が戻ってきた。

平成 22 年 3 月には三陸縦貫自動車道登米東和 I C が開通し、仙台圏からの観光客の増加による売上げ U P も期待されている。



写真 2 直売所での販売状況

## (2) 「ビーンズくらぶ」の立ち上げ

直売所の売上げが好調となってきたことから、さらに販売を拡大するため地区内の遊休農地を活用し、作物を生産する取組みが始まった。このような中、地区内の童子下集落<sup>どうじした</sup>では、新たに女性農業者が「ビーンズくらぶ」を結成し、集落内の遊休農地 22 a を借りて、えだまめ、ちぢみ雪菜の生産を始めた。

今後は、生産品目を増やし、学校給食への食材提供や地元イベントでの販売、加工品開発の取り組み等を計画している。



写真 3 ちぢみ雪菜の現地検討会

## 3. 生活・環境整備面における特徴

### (1) 「ひころの里」を中心とした交流、伝統文化継承の活動

委員会ではひころの里において、毎年、「ひころの里盆踊り大会」や「ひころの里秋まつり」を開催し、町内外の人との交流を図っている。

特に秋まつりでは、委員会の趣向をこらしたイベント内容により来場者が増加傾向にあり、平成 21 年は 1,000 人の人出で賑わった。

また、それまで入谷地区の八幡神社の奉納でしか行っていなかった伝統芸能

の「入谷打囃子<sup>いりやうちばやし</sup>」をひころの里秋まつりでも披露するようになり、まつりの重要な出し物の一つとなっている。この入谷打囃子は、県の無形民俗文化財にも指定されており、委員会のメンバーが地元小学校で伝承活動を行っている。

なお、活動拠点として利用しているひころの里は、毎年、委員会のメンバー200名ほどで清掃・草刈り作業を行い、施設の良い管理に努めている。



写真4 入谷打囃子

## (2) 「ひころレディース」の取り組み

平成7年、養蚕の伝承施設としてひころの里に「シルク館」が開設されたことを契機に、繭細工作りを行う組織として、地区の女性たちが「シルクレディース」を発足し活動を行ってきた。

平成18年、南三陸町における施設指定管理者制度のスタートを受け、シルクレディースの中の7名の女性農業者が「ひころレディース」を結成し、ひころの里の指定管理者となった。このことにより、自ら取り組みの企画立案が可能となり、機織りや繭細工作りの体験講習のほか、自家製野菜や山菜中心の地元食材ばかり（のみ）で作った料理の提供を行う「ばかり茶屋」を開設した。



写真5 ばかり茶屋

このほか、子供を対象とした農村体験フィールドとして、教育ファームを開園し、果樹の植樹やそばの栽培など行っている。

## (3) ひころの里山づくり活動

平成21年度からは、ひころの里周辺の森林を活用し、遊びと癒しの空間を創設する「ひころの里山づくり」の取り組みが開始された。

この取組は、これまで委員会が取り組んできた桃源郷構想をさらに発展させたもので、①ひころの里から周辺の山林及び直売所をつなぐ遊歩道の整備、②枝打ち、間伐、下刈作業体験やツリーハウス、山小屋づくり体験などが行えるフィールドの整備、③シイタケやマイタケ、シメジ等の植菌や収穫を楽しむことができるキノコの森づくり、④体験者及び来場者が記念植樹できる、記念の森づくりなどが計画されている。

第3図 ひころの里山づくり計画図

